

〈研究ノート〉

配偶者からのサポート状況の違いが 保育所サポートと母親の育児ストレスの関係に与える影響

大内 善広¹⁾ ・ 野澤 義隆²⁾ ・ 萩原 康仁³⁾

【要旨】

本研究は、母親の配偶者からのサポート状況に焦点を当て、そのサポート状況の認識の違いによって、保育所からのサポートの認識と育児ストレスの関係にどのような影響を与えるのかを検討した。その結果、配偶者から積極的なサポートが受けられていると認識している母親と比較して、配偶者が不在もしくは配偶者から積極的にサポートしてもらえないと認識している母親は、育児ストレスが高いことが示された。また、配偶者が不在の母親に対して、保育士からのサポートを受けている認識が特に育児負担感を軽減する可能性が示された。

キーワード：配偶者からのサポートの認識、保育所からのサポートの認識、育児ストレス

1. 目 的

2009年度の保育所保育指針の改定より、保育所の職務として保護者への支援が明記されるようになった。保育所保育指針解説書（厚生労働省，2008）によると、改定の背景として、「不安や悩みを抱える保護者が増加し、養育力の低下や児童虐待の増加が指摘されて」（p.2）おり、そうした保護者に対していかに支援するのが保育者の役割として期待されている。

一方で、平成30年度版の少子化社会対策白書（内閣府，2018）によると、2016年時点での父親の家事育児時間は1日あたり83分と、過去と比較して増加傾向は見られるものの、母親の家事育児時間は1日あたり454分であり、依然として家事育児に関する負担は母親に集中してしまっている状況である。このような状況の中、母親に対する支援は特に重要であると言えよう。

こうした母親の子育てに関する不安や悩みについては、育児ストレスという枠組みで捉えられると考えられる。育児ストレスとは、子どもや育児に関する出来事や状況などにより母親が経験する困難な状態（佐藤・菅原・戸田・島・北村，1994）であり、この育児ストレス

¹⁾ 城西国際大学 福祉総合学部 福祉総合学科

²⁾ 東京都市大学 人間科学部

³⁾ 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 基礎研究部

はイライラや不安などの情動反応を増大させる要因であるとの指摘がされている（清水，2003）。母親の育児ストレスを軽減するための社会的な体制作りは重要な課題である。

母親の育児ストレスをどのように軽減するのかについて、ソーシャル・サポートの観点からの研究が蓄積されており、最も重要なソーシャル・サポートは配偶者（夫）からのサポートであることが指摘されている。例えば、竹田・岩立（1999）では、母親は具体的な行動の援助源を配偶者に求めていることが示されている。また、寺見（2015）は、配偶者からのサポートが育児ストレスを軽減することを明らかにしている。

一方、配偶者のサポートが得られないことによる母親のストレスへの影響について、例えば、太田・村上（2018）は、母子家庭と核家族を比較して、母子家庭の母親の方が精神的サポートを受けられているという感覚が低く、育児ストレスが高いことを指摘している。また、田中・中澤・中澤（1996）は単身赴任と帯同赴任の比較によって検討し、配偶者の不在が一般的なストレス反応や育児不安を高めるが、それほど大きな影響がないことを明らかにしている。ただし、田中ら（1996）の研究は、小学生から高校生までの子どもを持つ家庭を対象に調査を行っているため、就学前の子どもにも同様の知見が適用できるのかについては注意する必要がある。

このように、何らかの事情で配偶者からのサポートが受けられない場合には、別のサポート源からのソーシャル・サポートを確保する必要があり、そうしたサポート源として、保育所や保育士からのサポートが期待される。大内・野澤・萩原（2012）では、母親が保育士からのサポートを受けていると感じているほど、育児ストレスが低く、マルチリートメントも行わないことを明らかにしているが、配偶者不在の母親にとっては特に保育士からのサポートの影響は大きいと考えられる。

そこで本研究では、母親が持つ配偶者のサポート状況の認識によって、母親の利用している保育所の所長（園長）やクラス担当保育士からのサポート状況の認識と、育児不安感や育児負担感といった育児ストレスとの関連性に違いが見られるかを検討することを目的とした。

2. 方 法

2.1 調査方法

調査は2011年11月から12月にかけて質問紙法により行われた。関東圏のX県内の全保育所を対象に調査協力依頼文書を発送し、協力の承諾が得られた保育所に対して質問紙を郵送し、保育所内で当該保育所を利用している母親に対して質問紙を配布していただいた。

2.2 調査項目

まず、配偶者との同居状況について、「1：配偶者はいない」「2：配偶者が単身赴任中」「3：配偶者と同居しているが、長期の出張で不在がち」「4：同居している」の4件法にて尋ねた。

また、以下の調査項目は全て、「あなたの子育ての状況や考えについてお尋ねします。最もあてはまる番号に○をつけてご回答下さい。」という教示で行い、「5:非常にあてはまる」「4:どちらかといえばあてはまる」「3:どちらともいえない」「2:どちらかといえばあてはまらない」「1:全くあてはまらない」の5件法にて回答を求めた。

配偶者からのサポート状況 「父親は積極的に育児に参加してくれている」「父親は精神的に自分を支えてくれている」の2項目で、配偶者である父親から育児についてサポートを受けていると認識しているかどうかについて尋ねた。

保育士からのサポート状況 「クラス担当の保育士は、あなたの子どもについてよく理解してくれている」「クラス担当の保育士は、自分の育児の悩みについてよく理解してくれている」「クラス担当の保育士は、自分の話をよく聞いてくれていると思う」「クラス担当の保育士は、頼りになると思う」の4項目で、保育所からのサポートの受けとめについて、クラス担当の保育士からサポートを受けていると認識しているかどうかを尋ねた。

園長からのサポート状況 「保育所の園長先生は、あなたの子どもについてよく理解してくれている」「保育所の園長先生は、自分の育児の悩みについてよく理解してくれている」「保育所の園長先生は、自分の話をよく聞いてくれていると思う」「保育所の園長先生は、頼りになると思う」の4項目で、保育所からのサポートの受けとめについて、園長からサポートを受けていると認識しているかどうかを尋ねた。

育児不安感 「子どもの発達のことによその子どもとも比べてしまい、心配になる」「育児について期待していたことと現実のギャップがある」「子どもが将来一人で自立していけるかどうか心配である」「この先どう育てていったらよいかわからない」「子どもとの接し方や遊び方がわからない」の5項目で、育児ストレスとして育児に関して不安を感じているかどうかを尋ねた。

育児負担感 「子どもを育てることが負担になる」「毎日の生活が、ほとんど子ども中心で忙しく感じる」「自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」「子育てそのものに、苦痛を感じる」「子育てのために、自分の時間がとれない」「子育てのために、趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている」の6項目で、育児ストレスとして育児に関して負担を感じているかどうかを尋ねた。

2.3 分析

38箇所保育所より得られた1,604名の母親からの欠損のない回答を分析対象とした。分析対象の1,604名について、配偶者の状況によって以下の3水準に分類した。なお、本研究では、配偶者からのサポート状況の尺度得点が8点以上を積極的なサポートとした。

水準 1: 配偶者がいない、配偶者と同居しているが長期の出張で不在がち、あるいは単身赴任中の母親

水準 2: 配偶者と同居しているが、配偶者の積極的な育児サポートがないと認知していると

された母親

水準 3：配偶者と同居しており、配偶者の積極的な育児サポートがあると認知しているとされた母親

その上で、育児ストレスである育児不安感、育児負担感を目的変数として Figure 1 のような多変量回帰モデルを検討した。説明変数は、保育士からのサポート状況、園長からのサポート状況の他に、水準 3 を基準として水準 1、水準 2 のダミー変数、保育士および園長からのサポート状況と水準 1、2 のダミー変数を掛け合わせた以下のような交互作用項を用いた。

交互作用項 1：水準の違いによる保育士からのサポートの育児不安感への影響

交互作用項 2：水準の違いによる園長からのサポートの育児不安感への影響

交互作用項 3：水準の違いによる保育士からのサポートの育児負担感への影響

交互作用項 4：水準の違いによる園長からのサポートの育児負担感への影響

この交互作用項は、水準によって保育士や園長からのサポート状況が育児ストレスに与える影響が異なるかどうかを検討するものであり、それぞれの交互作用項の有無による 16 通りのモデルを分析し、AIC や BIC、 χ^2 値によってモデルの比較を行い、採択するモデルを決定した。なお、AIC および BIC はモデルの比較を行う際に用いられる指標であり、その値が低い方が良いモデルであるとされる。また、 χ^2 値に基づいた有意性検定の結果、 p 値が 0.05 を下回るとモデルは良くないと判断される。

なお、本研究の分析には、Mplus (Ver. 7. 4; Muthén & Muthén, 1998-2015) を用い、データの階層構造（保育所によるクラスタリング）を考慮したうえで、構造方程式モデルにより最尤推定法にて行った。

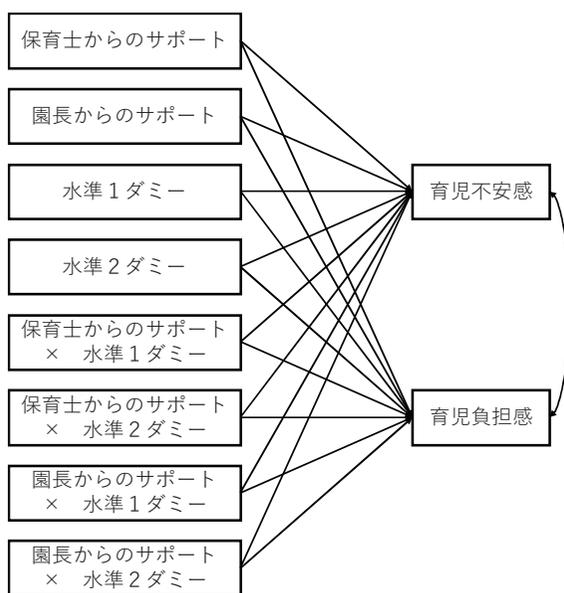


Figure 1 分析モデル

2.4 倫理的配慮

本調査の実施に際し、フェイスシート上の文書にて、回答者個人が特定されないこと、回答を控えたい質問については無回答でも良いこと、データは全て統計的に処理することを周知した。

3. 結果

配偶者との同居状況およびサポート状況から、3水準に分類したところ、「配偶者がいない、配偶者と同居しているが長期の出張で不在がち、あるいは単身赴任中の母親（水準1）」が204名（12.72%）、「配偶者と同居しているが、配偶者の積極的な育児サポートがないと認知しているとされた母親（水準2）」が496名（30.92%）、「配偶者と同居しており、配偶者の積極的な育児サポートがあると認知しているとされた母親（水準3）」が904名（56.36%）となった。なお、配偶者からのサポート状況における2項目間の相関係数は $r=0.686$ ($p<.001$)であり、この2項目の合計得点を用いることには問題はないと考えられる。また、配偶者と同居している母親（水準2, 3）における配偶者からのサポートの尺度得点の分布はFigure 2の通りである。

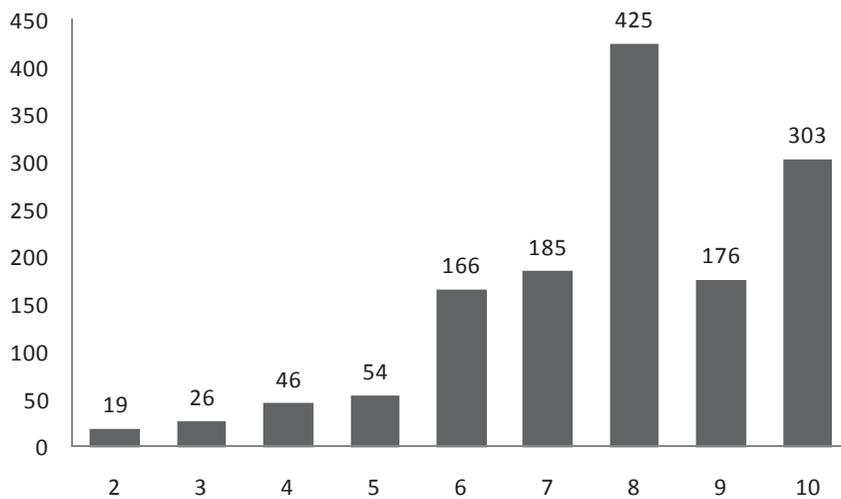


Figure 2 配偶者と同居している母親における配偶者からのサポートの尺度得点分布

次に、保育士からのサポート状況、園長からのサポート状況、育児不安感、育児負担感の4尺度についての内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、それぞれ、 $\alpha=.897$, $.929$, $.820$, $.838$ であり十分な内的整合性があることが確認された。そのため、以後の分析においては、各尺度の合計得点を用いることとした。

交互作用項の有無による16通りの回帰モデルを分析した結果をTable 1に示す。なお、Table

1 について、例えばモデル 2 は交互作用項 1 のみに○が付いているが、これは交互作用項 1 についての二つの係数は自由母数とし、交互作用項 2 から 4 についての六つの係数を 0 と固定したモデルであることを意味する。分析の結果、全ての交互作用項が存在しないというモデル 1 (AIC = 18509.802, BIC = 18579.746) が最も BIC が小さく、水準の違いによる保育士からのサポートの育児負担感への影響(交互作用項 3)のみ仮定するモデル 4 (AIC = 18507.400, BIC = 18588.104) が最も AIC が小さいという結果になった。いずれのモデルも χ^2 値は有意でなくモデルが棄却されるものではなかったが、本研究では、分析モデルの中で最も節約されたモデル 1 を選択した。ただし、AIC が最小のモデル 4 についても、興味深い知見が得られたため、付加的に解釈することとした。

モデル 1 の適合度指標は、RMSEA = 0.000、CFI = 1.000、SRMR = 0.002 であり、非常に当てはまりが良かった。モデル 1 における分析結果の非標準化解を Table 2 に示す。検定については、5%を有意水準とした。

育児不安感へのパスについては、保育士からのサポート状況(-0.166)の主効果が有意であった。配偶者との同居状況およびサポート状況については、検定の数値を 3 とし、ボンフェローニの方法で有意水準を調整した (0.05/3 = 0.016) 上で、水準 1 のダミー変数 (0.902)、水準 2 のダミー変数 (1.146) が有意であった。

育児負担感へのパスについては、保育士からのサポート状況(-0.321)の主効果が有意であった。配偶者との同居状況およびサポート状況については、同じ方法で有意水準を調整した上で、水準 2 のダミー変数 (2.778)、水準 1 と水準 2 のダミー変数のパス係数の差 (-1.824) が有意であった。

Table 1 モデル比較

モデル	不安感		負担感		AIC	BIC	χ^2	df	p
	交互作用項1 保育士サポート	交互作用項2 園長サポート	交互作用項3 保育士サポート	交互作用項4 園長サポート					
1					18509.802	18579.746	7.385	8	0.496
2	○				18512.153	18592.857	6.025	6	0.420
3		○			18513.535	18594.239	7.029	6	0.318
4			○		18507.400	18588.104	1.899	6	0.929
5				○	18511.884	18592.588	5.605	6	0.469
6	○	○			18515.359	18606.823	5.282	4	0.260
7	○		○		18510.504	18601.968	1.202	4	0.878
8	○			○	18514.433	18605.897	4.382	4	0.357
9		○	○		18511.066	18602.531	1.634	4	0.803
10		○		○	18515.830	18607.294	5.808	4	0.214
11			○	○	18510.384	18601.848	0.882	4	0.927
12	○	○	○		18513.709	18615.934	0.477	2	0.788
13	○	○		○	18517.654	18619.879	4.223	2	0.121
14	○		○	○	18513.487	18615.712	0.188	2	0.910
15		○	○	○	18514.330	18616.555	0.840	2	0.657
16	○	○	○	○	18517.251	18630.236	0.000	0	-

Table 2 モデル1の分析結果

パス係数	育児不安感			育児負担感		
	推定値	標準誤差	有意確率	推定値	標準誤差	有意確率
保育士サポート	-0.166	0.032	0.000	-0.321	0.044	0.000
園長サポート	0.011	0.034	0.752	-0.041	0.039	0.290
水準1ダミー	0.902	0.365	0.013 *	0.954	0.546	0.080
水準2ダミー	1.146	0.234	0.000 *	2.778	0.259	0.000 *
ダミー変数の差(水準1-水準2)	-0.244	0.344	0.478	-1.824	0.542	0.001 *
切片	12.428	0.601	0.000	21.420	0.783	0.000
残差分散	15.881	0.705	0.000	28.611	0.843	0.000
負担感との共分散	10.387	0.665	0.000			

*は配偶者との同居状況およびサポート状況について、ボンフェローニの修正を加えた上で5%水準で有意

モデル4の適合度指標は、RMSEA = 0.000、CFI = 1.000、SRMR = 0.001であった。モデル4における分析結果の非標準化解をTable3に示す。モデル4は育児負担感についての交互作用項の影響を検討するモデルであるため、この部分の結果のみに着目した。検定の数値を3として、ボンフェローニの方法で有意水準を調整した(0.05/3 = 0.016)上で、保育士サポートと水準1の交互作用項(-0.263)が有意であった。

Table 3 モデル4の分析結果

パス係数	育児不安感			育児負担感		
	推定値	標準誤差	有意確率	推定値	標準誤差	有意確率
保育士サポート	-0.166	0.032	0.000	-0.266	0.069	0.000
園長サポート	0.011	0.034	0.752	-0.036	0.040	0.366
水準1ダミー	0.902	0.365	0.013	4.908	1.521	0.001
水準2ダミー	1.146	0.234	0.000	3.299	1.747	0.059
保育士サポート×水準1				-0.263	0.095	0.006 *
保育士サポート×水準2				-0.032	0.115	0.779
交互作用の差(水準1-水準2)				-0.231	0.117	0.049
切片	12.428	0.601	0.000	20.483	1.079	0.000
残差分散	15.881	0.705	0.000	28.514	0.837	0.000
負担感との共分散	10.379	0.672	0.000			

*は交互作用について、ボンフェローニの修正を加えた上で5%水準で有意

4. 考察

分析の結果、まず、配偶者からのサポート状況について、Figure 2の結果や3水準への分類結果から、配偶者と同居しているケースにおいて、配偶者から積極的なサポートを受けていると認識している母親がいる一方で、配偶者の不在や消極的なサポート等の理由により、配偶者から十分なサポートを受けていない母親もいるということが示された。こうした結果から、育児における重要なサポート源である配偶者からのサポートが十分に受けられずにいる母親についての実態が示されたと言えよう。

次に、多変量回帰モデルの分析結果から、交互作用項のないモデル1が採択され、保育士

からのサポートを受けていると認識しているほど、育児不安感や育児負担感が低いことが示された。また、「配偶者と同居しており、配偶者の積極的な育児サポートがあると認知しているとされた母親（水準 3）」と比較して、「配偶者がいない、配偶者と同居しているが長期の出張で不在がち、あるいは単身赴任中の母親（水準 1）」や「配偶者と同居しているが、配偶者の積極的な育児サポートがないと認知しているとされた母親（水準 2）」は育児不安感が高いことが示された。さらに、「配偶者と同居しているが、配偶者の積極的な育児サポートがないと認知しているとされた母親（水準 2）」は、「配偶者がいない、配偶者と同居しているが長期の出張で不在がち、あるいは単身赴任中の母親（水準 1）」や「配偶者と同居しており、配偶者の積極的な育児サポートがあると認知しているとされた母親（水準 3）」と比較して育児負担感が高く、配偶者の育児への消極的な姿勢が育児ストレスにネガティブに影響を与えていることが示唆された。

また、積極的には選択できないモデルであるものの、モデル 4 の分析結果を見ると、「配偶者と同居しており、配偶者の積極的な育児サポートがあると認知しているとされた母親（水準 3）」と比較して、「配偶者がいない、配偶者と同居しているが長期の出張で不在がち、あるいは単身赴任中の母親（水準 1）」において保育士からのサポートが高いと育児負担感が低いという交互作用が見られた。この結果は、配偶者不在の母親に対して、保育士からのサポートが特に重要であるということを示している。ただし、本研究の分析結果からは、そうした交互作用的な影響があることを示唆するに留まっている。

5. 本研究の限界と今後の展望

最後に本研究の限界と今後の展望について述べる。本研究において、配偶者からのサポート状況による保育所からのサポートの育児ストレスへの影響について検討したが、選択したモデルは交互作用項がないモデルであった。配偶者からのサポート状況と保育士からのサポートの交互作用が育児負担感に与える影響についての交互作用は示唆されたが、この影響を明確に示すためには、この部分に焦点を当てた、さらなる調査を要する。

また、本研究では、母親を対象とした調査によって、配偶者や保育所からのサポート状況の認識や育児ストレスについて検討している。実際にどのようなサポートがあったのかということと、母親がサポートを受けたと認識したかどうかは同一のものではない。例えば、同一のサポートを受けたとしても、人によってはそれを十分なサポートと認識し、別の人は不十分なサポートを受け取ることも考えられる。配偶者から積極的にサポートを受けていないと認識している母親について、十分なサポートであると判断しうるサポート内容への要求が高いために不十分であると認識しているという可能性もある。そのため、配偶者や保育士などを対象とした調査も同時に行い、実際のサポートの程度と母親のサポートへの認識を比較するなど、さらなる検討が必要であろう。

また、本研究の調査は全国の母親を対象に無作為抽出して実施されたものではないため、本研究結果についての一般化可能性は担保されていない。今後、他の地域での調査や全国調査等において、本研究の知見の外的妥当性を検証していくことが求められる。

【引用文献】

厚生労働省 (2008). 保育所保育指針解説書

Muthén, L. K., & Muthén, B. O. (1998-2015). Mplus:Statistical analysis with latent trait variables(Version 7.4)

[Computer software]. Los Angeles, CA: Author.

内閣府 (2018). 平成 30 年度版 少子化社会対策白書

太田仁・村上由衣 (2018). 母親の家庭・職場環境による子育てストレスの差と保育園・幼稚園への期待, 梅花女子大学心理こども学部紀要, 8, 17-34.

大内善広・野澤義隆・萩原康仁 (2012). 保育所長や保育士からの知覚されたサポートが母親の育児ストレスに与える影響, 日本教育心理学会総会発表論文集, 54, 624.

佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則 (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連, 心理学研究, 64(6), 409-416.

清水嘉子 (2003). 育児ストレスの実態研究: ストレス情動反応を中心にして, 母性衛生, 44(4), 372-378.

竹田小百合・岩立京子 (1999). ソーシャル・サポートが育児ストレスにおよぼす効果について: 特定のサポート源の違いおよびサポートに対する必要度との関連から, 東京学芸大学紀要 第 1 部門 教育科学, 50, 215-222.

田中佑子・中澤潤・中澤小百合 (1996). 父親の不在が母親の心理的ストレスに及ぼす影響: 単身赴任と帯同赴任の比較, 教育心理学研究, 44(2), 156-165.

寺見陽子 (2015). 母親の育児ストレスの背景とソーシャルサポートに関する研究: 母親の成育経験と子育て環境との関連, Journal of the Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University = 人間科学部篇: JOHS, 4, 59-73.

付 記

本研究は、2011～2014 年度科学研究費助成事業 (基盤研究 C) 「母親の育児ストレスを軽減させる保育所や保育士の取り組みの研究 (課題研究番号: 23530803, 研究代表者: 城西国際大学 大内善広)」の補助を受けて行われた。また、本研究の一部は日本教育心理学会第 55 回大会にて発表された。

A study of the effects of different cases about support from partner on the relationship between support from childcare center and stress

Yoshihiro Oouchi, Yoshitaka Nozawa, Yasuhito Hagiwara

Abstract

This study focused on the mothers' cognition of support situation from partner and examined what kind of support situation from partner affect the cognition of support from a nursery school and the child care stress. As a result, it was shown that child care stress was higher when mothers feel that the support from a partner is not received than they feel that active support is received by a partner. In addition, for mothers without the partner, the possibility that the support from a childcare person strongly reduced the child care burden feeling was shown.

Key word: the cognition of support from partner, the cognition of support from childcare center, stress